

キリスト教社会主義研究に関する中間報告

——一九〇二世紀英国の事例をもとに「受肉の神学」「千年王国説」をどう捉えるか——

独立系研究者 倉井香矛哉

・はじめに

今回は、二〇一五年一月から継続しているキリスト教社会主義に関する研究の「中間報告」を行いたい。というのも、調査を進めていくにあたって、社会運動としてのキリスト教社会主義運動の背景にある（「贖罪の神学」と対置される）「受肉の神学」の評価、あるいは、千年王国説の扱い、「キリストの再臨のあとに神の国が到来する」のか、それとも、「再臨にさきがけて、人間の手で神の国＝理想社会の建設を目指す」のか、といった神学的課題についても慎重に検討する必要がある、ということに思い至ったため、ひきつづき時間をかけて研究する必要があると感じているからである。

大西宏氏コメント：実は私も非常に興味をもつテーマなのです。ある講演会で南原元東大総長が政治的言説活動をしていたことをそのまま伝道と同一価値……という趣旨の話聞いたのですが、すんなり心に落ちませんでした。かといってそれは信仰者として大切なことであることに疑う余地はありません。この辺りについて深いところからヒントを得たいと期待しています。これは単なるキリスト教社会主義運動史の範疇に留まるテーマではありません。

・英国におけるキリスト教社会主義運動の概観

発行者は、二〇一五年にキリスト教社会主義に関する研究を開始した。一月一日（日）、万聖節（諸聖人の日）に設立された白十字キリスト教社会主義研究会（白十字の会）は、約一年の準備期間を経て、二〇一六年一月に機関誌『基督教友愛新聞』を創刊。現在に至るまで、代表者（書記長）の日々の労働の合間に、月刊のペースで刊行をつづけてきた。

具体的な研究内容としては、一九世紀中盤以降のイギリスにおける産業化・機械化の進展とキリスト教会の動向、とくに英国教会（イングランド国教会）の事例を概説し、聖職者のF. D. モーリス、法廷弁護士J. M. ラドロー、作家のチャールズ・キングズリーをはじめとするキリスト教社会主義者たちの運動について学んだ。一八四八年を起点とする英国のキリスト教社会主義運動は、その後、一旦収束し、人間精神を「掘り下げる」ことを目指したモーリスによる労働者教育の取り組みへと移行することになる。その系譜は、小説家としても著名なトマス・ヒューズをはじめ、美術評論家のジョン・ラスキンやラファエル前派の画家たちの協力によって、今日に至るまで継承されている。また同時に、労働者のための組織の「構築」を目指すラドローが主導した協同組合運動は、E. V. ニールらの協力を得て、（労働者生産協同組合と消費者協同組合とのあいだで緊張関係をはらみながらも）その後の国際的な協同組合運動の展開のうちに、その足跡を残している。

また、一八五〇年代中盤に一旦終焉したキリスト教社会主義運動は、「異端」の聖職者と呼ばれたスチュアート・ヘドラム率いる聖マタイ・ギルド（GSM）の創設、さらに、チャールズ・ゴアの主導するキリスト教社会連合（CSU）の設立によって、一八八〇年代に見事な復活を遂げるようになった。なお、この時期のイギリスでは、H. M. ハインドマン率いる社会民主連盟、ウィリアム・モリスやE. B. バックス、エリノア・マルクスらの結成した社会主義者連盟、さらに、フランク・ポドモアやウェップ夫妻の指導したフェビアン協会をはじめとして、さまざまな社会主義団体が設立されている。英国のキリスト教社会主義運動は、これらの団体とも時に連携し、ヨーロッパ社会を覆う不況の時代に対峙した。

↓キリスト教社会主義運動は、労働者の教育、協同組合運動などの方向性を含みながら、一八八〇年代の社会主義復活の時代に大きな広がりを見た。

しかし一方、教会中心的なCSUは、社会改良に関して行動的ではなかった。そのようなCSUの姿勢に対する不満を背景に、聖職者のパーシー・ウイドリントンや歴史家のリチャード・H・トニーらは、一九〇六年、教会社会主義者連盟（Church Socialist League、略称：CSL）を設立する。イングランド北部出身者が多く参加し、学術性よりも労働者色が強く、実効性を求めて国家機構を有効に利用しようとした。同じく一九〇六年に結成された労働党との協力を基本方針としていた。（初代労働党党首のケア・ハーデイは、一八七七年にキリスト教の信仰に至り、福音派の組合教会に通っている。ハーデイの社会主義は、政治的信条や経済理論にとどまらず、山上の垂訓に基づくキリスト教倫理と不可分であった。）

また、その後のキリスト教社会主義運動の中で特筆すべきは、建築家のA. J. ペンティが提唱したギルド社会主義である。一九〇六年の『ギルド制の復興』で産業社会を批判し、手工業や農業を基盤とする中世社会を理想化したペンティの思想は、トマス・カーライル、ジョン・ラスキン、ウィリアム・モリスらの系譜を源流とする。一九一四年、CSLはギルド社会主義を基本方針として認める決議を出している。

↓労働党との連携、ギルド社会主義などの思想を通じて、社会主義団体と労働者階級との連携の気運が強まっていたといえる。その成果は、国民教会を目指したウィリアム・テンブルの時代に結実することになる。

・「受肉の神学」とは何か

ここで特筆すべきは、黎明期のキリスト教社会主義運動には、英国教会の社会運動に向けたアプローチとしての側面があったという点である。一八三三年にはじまったオックスフォード運動以後、アングロ・カトリックとも呼ばれる高教会派の指導者たちは、現世を肯定的に解釈する「受肉 (Incarnation)」の神学に基づいて、精神的・内面的な救済のみを強調する福音派 (低教会派) と対立していた。モーリスは、彼の神学思想が「異端」であるとの理由から、一八五三年一〇月にキングズ・カレッジの教授職を罷免されている。しかし、それから程なくして、ロンドン労働者カレッジの創立に至った。その背景には、神学者としてのモーリスの思想が脈々と伏在している。その中心にあるのは、「神の国」であり、「キリストは世界の実際の根柢である」という確信である。モーリスにとってのキリスト教社会主義は、「神の国」があらゆる人間の現実や関係のうちに「実在」する「真実」であることを宣言するものであり、人間の関係性を掘り下げ、その根柢に「神の秩序」を発見し、人間存在を「再生」させることを目指すものであった。

さらに、ケンブリッジ大学でモーリスの講義に出席していたヘドラムは、聖マタイ・ギルドの創設の目的として、世俗主義者のキリスト教会への偏見に対処すること、聖餐式と祈禱書を重視すること、そして、「受肉の精神によって社会的・政治的問題の研究を進めること」の三点を掲げていた。また、一八八九年にキリスト教社会連合 (CSU) を設立したゴアの神学もまた、現世を肯定的に捉える「受肉 (Incarnation)」の神学である。

↓キリスト教社会主義運動には、F. D. モーリス以降、「受肉 (Incarnation)」の神学の系譜がつづいてきた。それは、人類の原罪による墮落とそこからの救済を重視する贖罪神学と対比される。

・「千年王国説」をどう捉えるか

モーリスの神学的中心にある「神の国」について、千年王国説、あるいは、その後の「神の国」運動との関連はどうか。先行研究においてはそれほど論及されていない。

また、一八八七年の「基本綱領」で社会主義を明確に標榜したフエビアン協会は、リカードの地代論とジェヴァンスの限界効用理論を採用し、漸進的な社会発展による理想社会⇨世俗的な千年王国の建設を目指した。

↓フエビアン協会はキリスト教社会主義の団体ではないが、聖マタイ・ギルドのステュアート・ヘドラムが在籍するなど、人脈上の交流があった。そして、ここでいう「理想社会の建設」という目標の背後には、(一九世紀末に知識人のあいだで流行した心霊主義とのかかわりを通じて) 世俗的な千年王国説が伏在している。

・中間報告まとめ

以上のように、現在は一九〜二〇世紀における英国の事例を調べている最中である。またおそらく、内村鑑三と賀川豊彦 (その他、明治〜大正期の基督教社会主義者) の神学的前提においても、再臨と「神の国」の到来については根本的な差違があるのではないかと考えられる (賀川の神学理解には独自のものがあるものの、彼が影

響を受けたアメリカの「社会的福音」には、再臨に先駆けて千年王国⇨理想社会の建設を目指す、という主張が強かったとされる)。発表後、これらの点についても話し合いたい。

今後、さらに二〇世紀へとつづく歴史を学び、グローバリゼーションがすべてを覆う現代の国際情勢を見定めるための視座を導き出したいと考えている。